
ふうちんろう

starship7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふつちんろう

【Zコード】

N6470Y

【作者名】

starship7

【あらすじ】

ひろしは、何十年かぶりにふつちんろうを訪れる。

若いころ、よく通った店だ。

そこには綺麗な娘がいた。

あれから、何年たつただろう。

20代半ばの頃だから、30年はたつてこると思ひ。

横浜のある駅で降りたとき、弘志は、ふと思いついて、ふうひん

した。少し寒くなり始めた秋の夕暮れだった。

ふうひんり、懐かしい名前だ

弘志が通っていた会社の営業所がこの駅の近くにあり、仲間たちは毎日集まつては、

会議をして、議論していたものだ。

若かったから、妥協なき議論だった。

それでも、ひとしきり議論しきつた後、も、飯食いに行くか、とふ

「つかんわく

毎日のように行った。

仕事の後に営業所に集まってさんざん議論するので、みなほとんど
飯も食つて

いなかつた。

だから、なおむし、ふつかんわくの飯はつまかつた。

ふつかんわくは、駅前の大通りの坂道を登つたところにあった。
2間ほどどの広さに

サッシ戸があつて、ガラガラと開けて入る。

細長い四角だが、調理場を二字に囲むようにカウンター席があり、
その周りにテーブル

席が2つ3つほどあつた。

マンガや雑誌・新聞なども置いてあつた。

ふつちんろうは、普通の小さな中華料理店だった。

少し違っていたのは、ふつちんろうの人たち、娘さんとお母さんの母娘が中国人

だつたことである。

弘志たちが行くのは、いつも10時か11時過ぎだつた。

娘さんはたぶん20代前半だらうか、お母さんは年が離れていて60歳過ぎの

感じだつた。

ラーメンや餃子、チャーハンなどを頼んでビールを飲んだりした。

学生気分が抜けていなかつたから弘志たちは、大きな声でまたもや議論していた。

母娘は少しひこひこしない日本語で弘志とあこがれしたり、少し話した

りした。

調理はもつぱらお母さんがやり、お密の相手や配膳、調理の手伝いは娘さんが

やっていた。

娘さんは面長で、清純な感じの人だった。

きれいな可愛い声で、しゃべりながら話すよつすは印象的だった。

お母さんの調理は美味しかった。

とくに昔からの秘伝だといつチャーハンは変わっていた。焼き豚をサイコロ状に

小さく切ってどんぶりに盛ったチャーハンに乗せるのである。

味は、とてもおいしかった。

もつぱらは、鶏肉の醤油煮。刻みキャベツに鶏肉の醤油煮をス

ライスして並べる

のだが、どうこうふうに作ったのか、極上の味がした。

ふうちんろうは70年続く店で、お祖父さんの代からこの味は秘伝として伝わって

いるらしいである。前は横浜にあったそうだ。

お母さんの使う包丁は長方形のもので、木の柄が取れてしまったのか、鉄の柄が

細く伸びていた。

まな板というものはなく、丸い大きな木を横から切つて、年輪がみえるものが調理台

に置かれていた。

お母さんは、大きなくじくじした田をしている人で、いつも調理をしながらこじらを

見たりあるので、そのくつくつした田が印象的だった。

弘志は時々一人で行くこともあった。

弘志は仲間とは違つて、毎日責任者として営業所で仕事をしていたからである。

そのうり、母娘と親しく話すようになっていた。母娘は福建省出身であるといふ。

お父さんと一緒に来たが、お父さんは亡くなっている。ふたりは

おじいさんの代から続いており、秘伝の味はお父さんに継がれ、お母さんに継がれて

きたものだそうである。

お母さんたちが30年前に日本に来たそつである。娘やこは日本で生まれたらしこ。

ある日、老酒の一升瓶をお母さんがくれた。

おいしい老酒だった。

娘さんの名は蓮花といった。

弘志は、蓮花に時々冗談を言って笑わせたりしていた。そのうちお互いに話すようになりした。

なり、蓮花は、弘志が注文していないものをひっそり出してくれた

一度、2人で山下公園に行つたことがある。

平日で店は休み。弘志も休みを取つて2人で遊ぼうといつことだつた。

散歩したり食事をしたり、2人は楽しく過ごした。

夕暮れ近くなつて、港が見えるが丘公園で座つて話した。

「蓮花、今度もまた来ようつね。ずっと一緒にいるのとこな。」

「うん、わうね。私も楽しかったわ。」

「蓮花さん、どうしたの。ずっと日本にいるの？」

「わたし、日本で生まれたから、ずっと日本にいるよ。それに、お母さんと一緒に、元気

ふうふうおつかをやつてこくのよ。」「

「そつか。おじこちゃんの始めた店だし、亡くなつたお父さんのためにも店は続け

なぐへつちやね。」

「ほんとはね、男の人気がいてほしこと思ひ。

「店をやつてこくの元で心細いよ。」

そう言つ蓮花の横顔は港の夕暮れの中に浮かんでいた。

その横顔は、今でも弘志の田に焼き付いている美しい蓮花だった。

弘志は、何も言えなかつた。

店を一緒にやるなどと云ふことは考えられなかつた。

弘志は、小さな店ではなく、もつと大きな目標をもつていた。店をやることはない

目標を捨てる」とだつた。

店で会つて冗談をいつたり、時々一緒に出掛けたりしていた。

そうして、1年ほどたつたろうか、弘志は、転勤することになつた。新潟支社へ行く

よつて言われたのである。若くして支社長への抜擢だつた。

新潟支社へ行つてから、蓮花とは会わなくなつた。

弘志はふうちゃんのことを忘れたことはなかつた。

でも、弘志は、まっすぐ進むしかなかつた。自分の道を選んだつも
りだつた。

そして、時がたつていつた。

薄暗くなり始めた、坂道を上ると、弘志は、ふうちゃんの前に
立つていた。

以前と変わらぬサッシの戸をガラガラと開けた。

「いらっしゃい」という声がして調理場の女の人がこちらを見た。

蓮花だつた。

「あれ、ひろしさん？ 太田さん？」 気が付くと蓮花は驚いた顔をし
たが

すぐににっこりと笑つた。

弘志は照れ臭で、ただ、うなずいた。まだ早いのだから、客のいない店に入り、

カウンターに座った。

「ひやしごり。ちょっと前に来たんで、寄つてみたんだ。」

店の中は昔と変わらない。全体にくすんだ感じがした。雑誌も新聞も同じ場所に

置かれていた。

蓮花の顔を見た。昔と変わらぬ蓮花がいた。少しやつれて、小じわも見えるが、

まぎれもなく蓮花の顔だった。

「元気そうだね」

「まあ、どうして、私年とったでしょ。恥ずかしいわ。」

「蓮花、変わらなによ。30年もたつたら僕はもう年寄りだよ。」

「なんか、食べる?」

「じゃ、チャーハンとビールをそれに鶏肉の醤油煮をお願いするよ」

ビールを出すと、蓮花がチャーハンを作り出した。

調理台の丸いまな板も包丁も昔のままだ。

蓮花が調理台に立つのは初めて見る。

弘志は調理していく蓮花にあれから自分がどんな暮らしをしていったのかを話した。

蓮花もお店を何とかやってきたことを話してくれた。

「ひして話していると若かつたころのことがつい昨日のことのように戦われる。」

お母さんが見えたのか。蓮花がずっと一緒に暮らしたいといつて

お母さんが見えないのだ。

蓮花が包丁を持つところと、お母さんから秘伝の味は受け継がれたのだろうか

「変わっただろ」

「あれから、何年も経ってる。年はとったけど、面影は、そのまま。

」

「蓮花は、前とかわんないよ。綺麗になつたね。」

昔のよひでお互に笑つた。

「なんで一度も連絡くれなかつたの。わたし、困つたよ。」

「いのん。 いろんなことがあったんだ。 そして年も取った。」

他の姫はここには現われない。

弘志はまだ元気になることがあるが聞かせないでいた。

蓮花は結婚したのだろつか。

お母さんもびっくりだのだろうか。

そのどちらも聞くことができなかつた。

「お母さん、弘志さんが來たこと知つたつらうよ。」と蓮花が言つた。

「そつか、お母さんは元氣なんだな。弘志はよひかへぬかの料理の作り方や

おこしかつたことを話した。蓮花はカウンターの横の小さな戸口から中に入つて

いった。

こんな入口は知らなかつた。そつこいえばトイレの口のわきにあつたなと思いました。

そうか、入口の向いには、2階への通路があつて、彼女たちの住まいになつてゐる

はずだ。

弘志はこの部屋には入つたことがなかつた。

じぱりくじて、蓮花が戸を開けた。

そこにはお母さんがいた。

車いすに乗つたお母さんは襟巻のよつたシヨールをまいてじつとていた。

蓮花が「弘志さんよ。弘志さん、来てくれたのよ。」と車椅子の横でお母さんの

耳のそばでいった。

少し中空を見るようだつたが、弘志を見て、田を少し輝かせた。そしていつも

笑つた。

たぶん90歳くらいになるお母さんは、蓮花と一緒にこの2階に住んでいるのだ。

どうやって2階から降りて車いすに乗ったのかはわからないが、車椅子に座つて

あまり動かなかつた。お母さんは、もつ調理はできないのだつ。

蓮花が後を

引き継いだのだ。

自分のために降つておてくれたと思つ、弘志は「じぱりべぶりです。おかあさん」

とこつて立ち上がつてあこせつた。

お母さんは何度もうなずいていた。

じぱりくじて、蓮花がお母さんを連れて2階に上がつてこつた。

弘志は、このふしづされにあれからうつと暮らじてこる蓮花のことを思つた。

蓮花はお母さんと一緒にくじて、お母さんの面倒を見て、そつと、結婚もしてこない

のだひづ。

ふしづの秘伝の味を受け継ぎ、今までの年続くふしづんりつを一人で

守つてきたのだ。

そういう人生、これまで考えたこともなかった。でも、蓮花がいなければ、

この店も秘伝の味も守られることはなかつたろう。娘に見守られてお母さんが

暮らしていくともできなかつたろう。

だから、蓮花の道は必要で絶対に変えられない道だつたのだ。小さな店を守り、

家族を守り、味を守る、かけがえない大切な道だつたのだ。

弘志は自分のこれまでのことをふり返っていた。

大きなこと、小さな店ではなく、この会社をどうしたらいいか、新しいビジネスモデル

を作るにはどうしたらいいかなど考えてきた。

営業所に詰めて、仲間たちと毎日毎日そういうことを議論してきた。

結論からいって、まだ何も変わってはない。

人々の動きは遅々として進まず、年をとつただけで、なにも変えることも作る「とも

できなかつたと弘志は思つ。

あのとき蓮花と一緒に進めばよかつたのだろうか。それも一つの道だつたわ。

でも、いつして、長ことを経て、再会するのも自分たちの道を歩いた結果なのだ。

お互に会つことはないかも知れないけれど蓮花の生き方は立派な生き方だと思った。

蓮花の料理を食べた後、

「おこしかつた。また来るね」と弘志は言つた。

「うん。お願ひね」。

蓮花が答えた。

弘志は、もう来ないかもと思つて、戸口をガラリと開けて、一度振り向いた。

「じゃ

といつて弘志は出て行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6470y/>

ふうちんろう

2011年11月20日00時10分発行